

本連載の目指すもの

筆者が英国の大学院に通っていた時、博士論文の研究でヨーロッパの天理教について調査をしていることを周囲の研究者や院生に伝えると、「ヨーロッパ人の信者はどれぐらいいるのか」といった類の質問を聞かれることがあった。それに対して自分が把握している人数を伝えると、ヨーロッパで教勢を拡大している宗教を例に挙げるなどして、「なぜそんなに現地人信者の数が少ない宗教を研究対象にするのか」というような答えが返ってくるのがしばしばあった。研究を始めた当初の頃は、それに対する明確な回答を持ち合わせておらず、聞かれる度に歯切れの悪い返事をしていたように記憶している。

その後、この問いを頭の片隅に置きながら調査を続けていたが、同時にその問い自体にどこか釈然としない部分があることに気づいた。「現地人信者の数が少ない宗教」を対象とするのに説明が必要であるとした時、逆に「現地人信者の数が多い宗教」であれば調査する理由が自明である、となる。そこには、多くの現地人信者が入信した外来の宗教は調査をする価値があり、そうでない集団にはその価値があまりないということが暗に示されている。

もっとも、別の国や地域で多くの現地人が入信した宗教に目を向けること自体は、学術的にもまた一般的な関心としても全く不思議なことではない。ただし、それを唯一ではないにせよ主な基準にして研究対象を選別してしまった場合、極めて一面的な基準で研究対象の価値が測られてしまうように感じたのである。

筆者が違和感を覚えた点については、海外に進出した日系宗教の研究全般においても多かれ少なかれ見られる前提であるとも言えよう。これまでの海外における日系宗教の研究については、日系移民社会を中心に伝道が進められてきた地域、日本の旧植民地となる地域、そしてそれらの地域も含めた非日系人による受容者が多い地域に注目が集まってきた。それは言い換えれば、その布教対象者が日系人・非日系人であるかに拘わらず、主にその宗教がいかに現地の人々に「受容」されてきたかに注目してきたと言っても差し支えないだろう。それは裏を返せば、日系移民社会で深く根付いているわけでもなく、また非日系人の信仰者が多くない宗教については、取り立てて研究対象として挙げる必要がないのではないかと、といった暗黙の了解にも近い感覚が共有されているように思えるのである。

本連載では、そういった関心を共有しつつも、天理教がいかに「受容」されてきたかという問いのみに還元されない視点を提起したいと考えている。より具体的に言えば、天理教がどのように「受容」されるか(されないか)から焦点を少しずらし、天理教という宗教伝統に備わっているとされる「文化」が、異文化伝道の文脈で伝道する側によってどのように語られ、そしてその過程でどのように「翻訳」されるかに注目する。

この「翻訳」という言葉については、次回以降で説明を加えるつもりであるが、ここでは暫定的に「天理教の教義、実践、伝統などを言語や表象を通して別の形で表現すること」とだけ

述べておきたい。ここで筆者が提起しているのは、天理教を「受け取る側」から天理教を「伝える側」の営みに焦点をシフトさせるアプローチである。ただしそれは、受容に注目してきた研究では伝える側の営みが考察されてきていない、という意味ではない。また、本連載で取り上げる国や地域において、天理教が現地人の信者に全く受容されていない、という意味でもない。誤解を避けるために強調しておきたいのは、本連載は「受容」に焦点を置く研究の陰に隠れてあまり語られてこなかった地域や文化圏の伝道者の営みに光を当てようとする試みである、という点である。

この関心をもとに、本連載ではヨーロッパとくにフランスでの天理教の伝道事情や歴史を事例として取り上げながら論を進めていく。このヨーロッパという地域は、筆者がこれまで天理教海外部の業務で関わってきた文化圏の一つであり、本連載につながる学術的関心はその関わりと有機的につながっている。次回以降で詳述するように、戦後のヨーロッパにおける天理教の伝道は、フランスのパリ郊外に設立された「天理教ヨーロッパ出張所」(設立当初は「天理教パリ出張所」、以下「出張所」)がその中心の拠点としての役割を担ってきた。出張所は、ヨーロッパ在住の天理教信者が集う場所としてやヨーロッパとコンゴを結ぶ中継点としてなど、設立された土地に限定されない多様な役割を果たしてきているが、ことフランスの文脈に目を向けてみると、二つの大きな特徴が浮かび上がってくる。

一つは、日本の旧植民地や日系移民をベースにした布教地域ではない点である。フランスが日本の旧植民地でないことは自明であるが、それに加えて現地の日系人をその主な布教対象者とせずに伝道を展開してきたことが関係している。もう一つは、フランスでは布教拠点が設立された段階から「文化活動」を一つの大きな軸に伝道を試みてきた点が挙げられる。これには、日本で一般的に言われるところの宗教団体として設立された出張所に加え、文化活動を行う別の法人として「天理日仏文化協会」(以下、「文化協会」)が同時期に立ち上げられ、その協会を通して文化活動を推進してきた点が関係している。

もっとも、文化協会や文化センターを通して文化活動を行うという方法自体はフランスに限られたことではない。本誌の他の連載やその他の論稿などでも、すでに取り上げられてきたように、法人として文化協会や文化センターを設立することを含め、日本語教育や日本文化・スポーツ振興等を伝道の一環として行うという手法は様々な地域で行われてきた。その中でフランスの特徴の一つ挙げるとすれば、文化協会が出張所と法的に完全に切り離されて設立・運営されている点であろう。本連載でも後ほど取り上げていくように、この二つの法人の距離感こそが、伝道者をして天理教をフランス社会に向けて「翻訳」する契機の一つになっているようにも思えるのである。

本連載では、そういった伝道者の実践や語りを取り上げながら、伝道者が天理教をヨーロッパの地でどのように「翻訳」しようとしてきたかについて論じていく。